

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月24日現在

機関番号：32411

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720110

研究課題名（和文） 米文学におけるボーディングハウス研究およびドメスティシティの概念構築に向けて

研究課題名（英文） A Study of Boardinghouse and Domesticity in Antebellum America

## 研究代表者

増田 久美子（MASUDA KUMIKO）

駿河台大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：80337617

研究成果の概要（和文）：本研究は「ボーディングハウス」を立脚点とした19世紀アメリカ文学のテキスト分析を通し、ドメスティシティという概念の構築および同概念によるアンテベラム期アメリカの文化形成について、綿密に検討することを目的とした。ボーディングハウスが表象されている個別の具体的資料を含め、多様なテキストの分析・検証を通して、アメリカの家庭の普遍性や限界を浮き彫りにし、ドメスティシティがさまざまな文化的政治性を有しうることを論証した。

研究成果の概要（英文）：This study explored how the ideology of domesticity could be conceptualized, and demonstrated that “boardinghouse” and its representations as a stark contrast for “home” had affected nineteenth-century America culturally as well as socially. Boardinghouse as cultural/social imagination in a wide range of literary and non-literary antebellum texts suggested that domesticity had affirmed its commitment to the nineteenth-century politics of culture.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：英米・英語圏文学

科研費の分科・細目：米文学

キーワード：米文学、19世紀アメリカ合衆国、ドメスティシティ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ドメスティシティという概念は、社会的に不可視であったアメリカ人女性を「可視化」しようとする作業に付随する言説として、1960年代の女性史を主眼とした歴史研究の分野から提示された（Barbara Welter, “The Cult of True Womanhood: 1820-1860”[1966]）。この概念は「家庭性」

のみが強調されていたが、とくにアンテベラム期の白人女性によるテキスト研究が本格化するなかで、「男女の領域分離主義」や「感傷の文化」等の強力なイデオロギーとともに、その文化的・政治的意義の再考および再解釈が試みられるようになった。たとえば、メアリ・ライアンは、ドメスティシティの基盤である「家庭」の創出が国

家建設事業とパラレル関係にあることを示唆し (Mary P. Ryan, *The Empire of the Mother: American Writing about Domesticity, 1830-1860* [1985])、また、エイミ・カプランは、19世紀アメリカの国外における帝国主義の先鋭化と国内におけるドメスティシティの涵養との間にみられる共謀性を指摘している (Amy Kaplan, *The Anarchy of Empire in the Making of U. S. Culture* [2002])。

(2) このような研究動向において、本研究の代表者は、19世紀の白人女性作家による小説や歴史記述のテキスト分析を通し、植民地主義をもたらす文化的現象がアメリカ社会におけるドメスティック・イデオロギーの受容過程と同期的な連関関係にあることを考察してきた。政治・経済等の公的領域から切り離されていたと認識されてきた女性たちが、じつは「家庭」という私的領域こそを土台にすることによって、当時のアメリカ社会が直面していた多様な公的領域の問題 (リベリア植民地問題、奴隷制および人種問題等) について、みずからの政治的主張を唱道していたことが判明されたのである。

(3) さらに本研究の代表者は、平成20年度科学研究費若手研究 (B) の研究課題「アメリカ文学におけるドメスティック・イデオロギーの流通と定着、多様性について」 (課題番号: 20720077) の助成を受けることにより、分析対象を「中流階級の白人女性」に限定してきた従前の研究のあり方について異議を唱え、人種・ジェンダー・階級等が複雑に交錯して形成された19世紀アメリカ社会の文化的本質を追究するという観点から、「白人女性文化」という支配的な枠組みに抗して、黒人男性作家のテキストに内包されているドメスティック・イデオロギーの分析を試みた。「家庭」の秩序を基盤とした母親的・政治的言説によって社会改革が志向されるドメスティック・イデオロギーが、公的権力をもたない白人女性たちの特殊な権能であるとすれば、黒人男性がそのイデオロギーを流用したのにはどのような意図があったのか。そのような問題提起のもと、テキストにおける黒人家庭が奴隷制や異人種間混淆という「汚濁」を排除しながら、人種暴動を契機に黒人の処遇をめぐる人種闘争の場と化すこと、また、ここに成立した「黒人ドメスティシティ」がアメリカ的市民性を附与するための過程および家庭的空間の基盤となることが分析され、それにより新たなアメリカ黒人像が提示されているという知見を得ること

ができた。

本研究はこのような研究背景を土台として、これまで看過されてきたボーディングハウスという鍵概念を投入することによって、より多面的なドメスティシティ研究をめざすべく開始された。

## 2. 研究の目的

本研究の代表者がめざす研究の全体構想は、「ボーディングハウス」という建築史的・文化的現象を立脚点とした19世紀米文学のテキスト分析を通し、ドメスティシティという概念の構築および同概念による19世紀米社会の文化形成を綿密に検討するものである。従来のドメスティシティ研究は、その基盤となる女性の領域、すなわち「家庭」そのものの表象を分析対象としてきた。これに対し、本研究は「家庭」の対立項としてのボーディングハウスを分析することによって、ドメスティシティがさまざまな文化的政治性を有しうることを論証するものとする。そのような視座を導入することにより、従来のドメスティシティ研究に新たな認識をうながすような大きな問いかけを試みたものである。

## 3. 研究の方法

(1) 19世紀アメリカのボーディングハウスに関する記録文書をデータベース化する。それをもとに、従来では建築史的に理解されてきたボーディングハウスについて、文化史的・社会史的知見を獲得する。

(2) ボーディングハウスをテーマもしくはモチーフとした文学テキストについて、グループ化する。第1グループは女性・男性作家による家庭小説、第2グループは男性作家によるジャーナリクテキストとする。第1グループは、セアラ・J・ヘイル、ファニー・フアン、T・S・アーサーらとし、それぞれの作品に関する研究書および雑誌・新聞記事等の一次資料を収集し、データベース化する。それにもとづき、第1グループ作品にみられるボーディングハウスの描写を精査し、そこから浮上する「家庭」およびドメスティシティの概念について仮説を立てる。

(3) 第2グループはウォルト・ホイットマンの記事や、英国人ジャーナリストであったトマス・バトラー・ガンによる著作とする。それぞれに関する研究書や一次資料を収集し、データベース化する。これをもとに、第2グループにおけるボーディングハウス観を把握し、そこから抽出される「家庭」およびドメスティシティの概念について仮説を立てる。

(4) 第1グループおよび第2グループにて引き出された仮説を統合し、ボーディングハウスという居住現象の視点から、ドメスティシティという枠組みにおける「家庭」の文化的・社会的意義を最終的な結論として導き出す。

(5) 以上のように、おもに家庭小説やジャーナリズム的作品から、これまで注視されてこなかったボーディングハウスを基軸とする分析を通して、アンテベラム期アメリカ合衆国における「家庭」とは何か、また、そこから発展的に思考される「ドメスティシティ」とは何かという問題について、複眼的な角度からの理解および評価を目指す。

#### 4. 研究成果

(1) アンテベラム期アメリカ合衆国の都市部では、階級・年齢・性差にかかわらず、多くのアメリカ人らがボーディングハウスという賃貸共同住居での生活を経験している。だが、ボーディングハウスが都市に出現した時代は「家庭の黄金時代」と呼ばれ、ヴィクトリア時代の道徳観に立脚した秩序ある家庭の領域を形成することが、白人中流階級の不文律とされていた。とりわけ「男女の領域分離」を教義とする作家や論者たちにとって、雑多な人間が共棲するボーディングハウスの存在は禁忌であった。

当時の人気女性誌の編集者であったセアラ・ヘイルは、その「公的権威」の立場から白人中流階級女性たちに絶大な影響力を及ぼす人物であった。「女性の領域」としての家庭概念を称揚するドメスティック・イデオロギーの擁護者かつ理論家であり、ヘイルは自著『ボーディングアウト』(1846)という家庭小説において、家庭と対蹠的に位置づけられるボーディングハウスを否定的かつ批判的に表現した。

ところが、他の作家による家庭小説やジャーナリズム的テキストにおけるボーディングハウス表象との比例研究を行いながら、ヘイルのテキストを精査していくと、そのパラドクスの語りを通して展開されているのが、表面的な男女の領域論とは別の、ドメスティシティにかかわる政治的議論であることが判明された。つまり、ボーディングハウス批判という手段から披露されるヘイルのドメスティシティ概念には、19世紀アメリカの中流階級文化における性差領域の交差性、すなわち、女性の領域であるはずの家庭に男性が執着することの必然性と、男性の領域とされていた政治思想上の論争に女性が参入することの可能性が明らかにされたのである。

この研究は、拙論「ボーディングアウトする女、家庭にしがみついた男—(反)ボーディ

ングハウス小説におけるセアラ・J・ヘイルのドメスティック・イデオロギー」『アメリカ研究』第45号(2011)としてまとめられた。なお、この論文により、第2回齋藤眞賞をアメリカ学会より受賞した。

(2) 上記の研究より得られた「家庭・女性・自由労働」という視点から、本研究は分析対象をアメリカ南北戦争期の「ポートロイヤルの実験」に参加したローラ・タウン(Laura Matilda Towne, 1825-1901)の日記および書簡へと拡大させた。

人種の別なく個人に本質的な「自由」をもたらすとされた「自由労働」の思想は、「解放」されたはずの黒人たちに別のかたちでの隷属を強要することになるが、その事態は中流階級の白人女性にとっても、ドメスティシティ上の解消できないジレンマ(市場という経済領域から切り離されたはずの家庭に、家事全般に従事する「賃金労働者」を受け入れざるを得ない現実)に、新たな解釈をもたらす契機にもなっている。この女性とドメスティシティの関係性に「人種」という視座を付加してタウンのテキストを検証してみると、ハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe, 1811-1896)の自由労働思想と鮮明な対照をなすことが明らかにされた。19世紀アメリカ合衆国の自由労働イデオロギーが、「女性の領域」を規制するドメスティック・イデオロギーという中流階級思想とどのように関わっていたのかを問題点とし、タウンとストウの二名の北部人女性によって示された自由労働に対する受容と懐疑の二面性を取り組んだ。

この研究は、「消されたエリナの賃金—ハリエット・ビーチャー・ストウとローラ・タウンにみる黒人女性の家内賃金労働をめぐる」『駿河台大学論叢』第45号(2012)という論文としてまとめられた。

(3) 19世紀の黒人男性作家フランク・ウェブ(Frank J. Webb, 1828-1894)が1857年に発表した小説『ゲリー家と友人たち』は、アンテベラム期フィラデルフィアの自由黒人の生活を中心に、異人種間混雑や人種暴動、パッシング等のテーマを本格的に扱った作品として、20世紀の黒人小説にとって先駆的であるとの評価がある。だが一方で、白人ブルジョアの「感傷的カリカチュア」であるともいわれてきた。事実、この作品は1960年代から70年代の読者が期待する黒人抗議小説ではけっしてなく、登場人物である黒人たちが白人中流階級の価値観にもとづくドメスティシティの規範を模倣しているという点で、これまで過小評価されてきた作品であった。

しかし、19世紀中葉のアメリカ黒人にとつ

て、模倣行為には特別な意義があった。自身の地位向上や社会的受容のための必須の素養であり、さらには、いわゆる「黒人ミメシス」には黒人たちが顕示しうる抑圧への抵抗と自治能力の証明として、白人社会の脅威にもなりえたのである。

すると、ウェブが北部的ドメスティシティの模倣行為をテキスト上で提示したのは、やはり、白人社会への自由黒人の威嚇的ないし警告的プレゼンスという意味になるのかという疑問が生じよう。「家庭礼讃」や「真の女性らしさ」等の言説を集約したドメスティシティとは、神聖な家庭君間と「弊風」の蔓延る市場を対立させることによって、家庭こそが女性による道徳的感化力を発揮できる場として掲揚された概念である。だが、同概念が当時の社会における人種や階級等の問題をより強力に前景化してしまうことも、これまでの研究によって明らかにされてきた。したがって、ウェブのテキスト上の模倣とは、ドメスティシティの規範が予期せぬ企図で捻出されうるものではないかという問題提起のもと、本研究は、アンテベラム期の黒人ドメスティシティを通して、家庭的空間が人種闘争の場として政治的領域と化すこと、また、模倣とみえる彼らの行為が、じつは白人規範であるドメスティシティの反定立的提示であることを解明した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 増田久美子「ドメスティシティの模倣と懐疑—『ゲーリー家と友人たち』における家庭的な人種暴動—」一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』第7号、2013年、査読有、293-310頁。
- ② 増田久美子「消されたエリナの賃金—ハリエット・ピーチャー・ストウとローラ・タウンにみる黒人女性の家内賃金労働をめぐる—」駿河台大学教養文化研究所紀要『駿河台大学論叢』第45号、2012年、査読無、55-75頁。
- ③ 増田久美子「ボーディングアウトする女、家庭にしがみつく男—(反)ボーディングハウス小説におけるセアラ・J・ヘイルのドメスティック・イデオロギー—」アメリカ学会『アメリカ研究』第45号、2011年、査読有、75-96頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

増田 久美子 (MASUDA KUMIKO)  
駿河台大学・現代文化学部・准教授  
研究者番号：80337617